

校長室だより 2022年度4月号



Be creative !

Just keep on trying ! 一校長式辞(抜粋) 校長 山口喜久枝

302名の新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

本校のスクールミッション、それは「未来社会を支える自律したリーダーの育成」です。私たちは、困った時に他者に手を差し伸べるのできる人、そしてその時に周りの人に「一緒にやろうよ。」と声をかける力、周りの人を巻き込む力を持つ人のことを、まさしくリーダーであると考えます。本校の合言葉「誰かのために」、その誰かのために考え、行動する力を持つ青年をこそ、育てたいと考えています。

さて、少しだけ、私ごとをお話します。本校では英語を一生懸命勉強する生徒が増えてきました。フィリピンに姉妹校もできました。英語を話さなくてはならない機会が私にも増えてきました。進路指導部長の岡部先生が「ラジオ講座はいいですよ。」と勧めてくださったので、去年の7月から私も聞き始めました。その中で、大好きな百瀬先生と出会うことができました。百瀬先生の声が心地よく、朝の通勤はラジオ講座とともに過ごしてきました。その百瀬先生が、この3月の最後の講座で私たちにこう言われました、「英語を流暢にお話できるまでには長い根気のいる勉強を続けなければなりません。」



でもね、「If you keep studying, the day will suddenly come.」—「私、わかったかもしれない」、そう思える日が突然やってきますよ。

皆さんの心の中には今、きっと、いろいろな思いが湧きあがっていることでしょう。これから始まる高校生活への希望に満ちあふれている人、まだ納得のいかない思いでここに座っている人、つかみきれない不安に押しつぶされそうになっている人、たった15年間の人生であっても、みな互いに違う経験をしてここに集まりました。いくつかの晴れやかな思いの陰に、誰もがいくつかの不安や後悔を抱えて生きています。「私って何だろう」「僕のやりたいことは何だろう」そう考え続ける日々がここ、日本福祉大学附属高校という新たなステージで始まります。

考え続けよう。答えは必ず見つかる。



百瀬先生がおっしゃるように「The day will suddenly come.」百瀬先生は続けてこう私たちにメッセージを送りました。「So don't give up. Just keep on trying.」君たちにも同じメッセージを送ります。Just keep on trying ! 挑戦し続ける3年間が始まります。私たちの学校のもう一つの合言葉「どの子も伸ばす」—君たちの成長に期待する思いと精一杯支え、伸ばす私たちの決意を述べ、2022年度入学式の式辞といたします。

新入生代表の言葉 2人の新入生が高校生活に寄せる自分の思いを、学年を代表して語りました。

★自分が大切にしてきた言葉は「文武両道」。自分の好きなことを続けていくためには、苦手なことにも辛抱して取り組み、自分の可能性を広げていくための努力をすることが必要だ。目の前の課題をひとつひとつ解決

し、視野を広く持つ。自分の可能性を自ら閉ざすことなく、様々なことに挑戦していく高校生活を送りたい。

田中嵩大(常滑中学校出身)

★お互いを支え合えるすばらしい仲間をたくさん作り、時に競い合いながら、自分自身に一層磨きをかけていきたい。私には高校卒業後、大学に進学し、保育士になり、子どもたちと関わり合うという夢がある。自分の夢に近づく努力を積み重ねるとともに、私たちを支えてくれる周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れずにいたい。

鹿嶋 海(師崎中学校出身)

フィリピン Silay Institute 校総長の Zamora 先生から皆さんへのメッセージです。2018 年度・2019 年度は来日し、入学式に参列して下さっていました。また、日本にお越しいただける日が早く来ることを祈っています。



Allow me to first greet our honored guests, school officials, parents, and students, a pleasant and productive day.

It's been years! And as I face you again, though via the web only, I am overwhelmed with happiness and gratefulness that despite everything that is happening around us, we still manage to stay intact. The connection that we have built with your school is something that we

would always be grateful of. Despite the adversities of the past two years, you always made us feel that the bond between us only gets stronger through the years. As we have promised before, we are always here, your sister school from the Philippines.

Let me reiterate again our wish to be your partner in education. We may not have the physical togetherness but rest assured that you can count on us in your quest for knowledge. Be it in research and development, cultural linkage or English language, we are always ready and willing to give you our service.

As we grow bigger in number, we are getting more and more aggressive in reaching our goals for internalization. And we believe that you are with us in this goal. You are one of the inspirations that we have in reaching our goal!

As I end, let me thank you once again for always considering us and making us a part of your activities like this one. So, without much ado, let me close this message with the biggest and warmest congratulations for this year's spring opening.



Arigatou gozaimasu.

Dr. Florecelita G. Zamora

今月の言葉 この涙を、ここに流してはいけない、と思った。

—『JK インドで常識ぶっ壊される』(熊谷 はるか 著)

父の赴任にともない、十代中盤でインドに暮らした著者。開放的な気性もあつてかインターナショナル学校にもすぐになじむ。近くのスラムの子どもたちを支援する活動に参加するが、課題の大きさと無力な自分との落差にとまどう日々。三年後、帰国の途につくも、これを十代という半端な時期の「良い思い出」などにしてたまるかと悔しんで。

朝日新聞「折々のことば」(2022. 3. 21掲載) 鷺田清一氏の文章より